

PATENT Attorney®

パテント・アトニー

弁理士は知的財産権を社会に活かすパートナー

特集

2002
弁理士の日イベント
東京・大阪・名古屋

ヒット商品を支えた知的財産権
新倉計量器株式会社「傘ぼん」
特許庁からのお知らせ
日本弁理士会からのお知らせ



秋号

日本弁理士会広報誌

2002

第27号

弁理士の日イベント

日本弁理士会は、7月1日の弁理士の日を記念するイベントを6月29日の土曜日に名古屋と大阪で行い、7月1日に東京で行いました。さらに、6月29日にはこれと併せて全国32ヶ所で無料発明相談を行いました。

東京

東京・電が関のイノホールでは、「どうする！日本の知的財産戦略」と銘打ったシンポジウムが催されました。このシンポジウムは、伊佐山建志元特許庁長官の基調講演と、「日本の知的財産の現状と課題」と題したパネルディスカッションの2部構成で行われ、主に、政府から提示された「知的財産国家戦略大綱」に基づいて、日本における今後の知的財産戦略のあり方などについて議論しました。



「パネルディスカッションの様子」

伊佐山建志氏



会場

近年、特許をはじめとする知的財産権が産業競争力回復の鍵として注目を集めているだけに、会場は超満員となり、会場の外でも熱心にメモを取る人の姿もあつたほどです。

第1部の基調講演では伊佐山元長官は、

「自身の通産官僚および特許庁長官としての経験に基づいて、産業政策的観点から今後の日本の知財戦略、ひいては国家戦略のあり方について熱弁を振るわれました。特に、80年代のアメリカが再生のために当時の日本を研究し尽くしたことや、現在「自身」が副会長を務める日産自動車業績のV字形回復を遂げるまでの努力など様々な実例を交え、日本再生のために民間企業が主体的に行動を起こすことの重要性を説かれました。

第2部のパネルディスカッションでは、伊佐山元長官、早稲田大学教授の高林龍氏、日経BP

教授の高林龍氏、日経BP

筑紫哲也氏



社の浅見直樹氏、当会会長の笹島富一雄をパネリストとし、コーディネータに「マナー」の筑紫哲也氏を迎えて行いました。

まずは、筑紫氏の「多事争論」風の語りからレイリスの例え話

から始まりました。筑紫氏は、米国の知的財産戦略として、その矛先がインドに向けられたと

きの話を、わかりやすく

お話されたことで、その後のディスカッションへの期待がぐっと膨らみました。

高林教授は、最高裁判所において知的財産権関連の調査官として活躍された経験から裁判所における審理の遅れについて検討・解説して頂きました。高林教授によれば、現在の裁判審理は1年半以内に決着しているものが殆どであり、審理の遅延は以前よりはすいぶん解消されているとのことでした。

伊佐山元長官が、特許庁での審査の遅延を解消するためには、特許庁側の努力はもちろんのこと、特許制度を利用する企業ないしは個人の工夫や協力も必要であると解説されました。

浅見氏は、昨今話題になっている職務発明について、以前から注目して数々の問題提起をされてきた方であり、発明者と企業との間での発明の取扱いに関して説得力あるコメントを頂くことができました。

笹島会長は、小中高校生を中心とした知的財産の教育について取り組む必要性を説かれました。

「知的財産国家戦略大綱」への期待度の高さを反映した形で、このシンポジウムも盛況のうちに終了いたしました。

大阪

2002年6月29日に、大阪市中央区の大阪産業創造館イノホールにおいて、弁理士の日記念特許無料相談会を開催するとともに「中国特許事情―中国で権利を守るには―」と題する記念講演会を開催しました。近年の中国への関心の深さを表すように、ホール定員の300名近い参加者がありました。



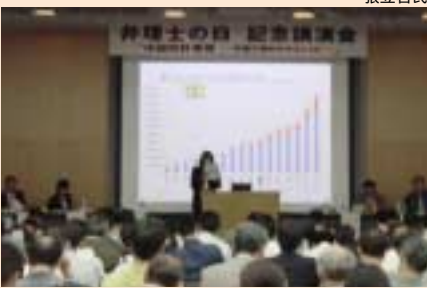
支部長挨拶

当日は、まず、中国弁理士の徐申民氏、中国特許代理人の張立岩氏の基調講演が行われました。その後、参加者からの質問に答える形でパネルディスカッションが行なわれました。

張立岩氏

パネルディスカッションでは、徐申民氏、張立岩氏に加えて、企業に勤務されている西野卓嗣弁理士、特許事務所経営の薦田正人弁理士、中国に留学されていた岩井智子弁理士がパ

ネラーとして加わ



名古屋

6月29日土曜日に名古屋のナディアパークで弁理士の日のメイン行事を行いました。ナディアパークは名古屋市中区栄のにぎやかな二画に位置します。2階の吹き抜けに立ているアトリウムでは、発明のいぶきノ古典と先端技術との対話」と題して、本場中国の京劇、中国雑伎、声楽家による歌唱という、訓練によって高められた人間の能力を發揮する古典のアトラクションと、二足歩行ロボットとして有名なASIMOによる8の字歩行やダンスといった先端技術のデモンストレーションが、11時から4時までのあいだに休む間もなく連続して繰り広げられました。

古典と先端技術は「見してあまり関連がない」と思われるかもしれませんが、科学技術という側面から見ると、両者は完全に両極端です。でも、見方を変えると案外共通している点もあるのではないのでしょうか。例えば雑伎では投げ上げた壺を頭で受けたら、



中国の京劇



中国の雑伎



ASIMOと握手する会長

二足歩行ロボット「ASIMO」

地上数メートルの背の高い一輪車に片足で乗ったり平気でしゃべります。このような「ASIMO」は「ASIMO」は「ASIMO」できないでしょう。でも、ロボットで二足歩行を可能にしたのは人間の英知です。人間は無限の可能性を秘めています。練習すればあつと驚く技ができるようになります。知恵を絞れば二足歩行ロボットも作れます。古典も先端技術も人間の可能性が作り上げていくという点で共通しているのだと感じるこのときのイベントでした。

当日はときおり雨の降るあいにくの天気でしたが、近隣のナディアパークのパーゲンセル初日という悪条件でしたが、それでもたくさんの方々がご来場され、楽しいひとときを過ごしていただきました。やはり番人気はASIMO。先端技術の結晶だとかいっても、実物を見れば小さくてかわいく、人気が高いのもっともたとうなずけました。



また、ナディアパークの6階会議室やCAD室では、特許無料相談、休日パテントセミナー、特許検索教室など盛りだくさんの企画を行い、どの企画もほとんど満員になるほどの盛況でした。休日パテントセミナーは日本弁理士会東海支部で約2年前から継続して行っており、すでに多くの常連さんがいらして、毎回盛況です。東海地方にお住まいの方で興味のある方はぜひご参加を。心よりお待ちしております。



東方時報(2002年7月11日号)の記事



22組の相談者が訪れ、日本弁理士会近畿支部の担当弁理士がこれらの相談に応じました。

なお、特許無料相談会には

また、講演会には、中国人向けインターネット新聞「新波網」の記者が取材にいられており、終了後に徐申民氏及び張立岩氏にインタビューが行なわれました。「新波網」にはその日のうちに「ニュース」としてとりあげられ、また、後日、在日中国人向け新聞「紙」(東方時報、関西華文時報)にも記念講演会の記事が掲載されました。

り、小谷悦司弁理士をコーディネーターとして中国代理人の立場、企業の立場及び日本の特許事務所の立場から、中国特許等について熱のこもったディスカッションが行なわれました。

参加者の多くは熱心にメモをとりながら講演、パネルディスカッションに関心入っており、また、参加者の中には「一般の方々、企業の知財担当者のみならず、弁理士、弁護士の姿も数多く見受けられました。

参加者にお願したアンケートでは、多数の方々様が様々なテーマに関して、このような講演会の開催を要望されていました。これらの声を参考に、来年度も記念講演会を開催したいと考えております。



徐申民氏



関西華文時報(2002年8月1日号)の記事

ヒット商品を支えた知的財産権

「傘ぼん」 町工場で生まれたユニークな発明品

特許第2562806号
商標第3196611号

VOL.

27



傘をシツと差し込んで手前にポンッ。瞬時に濡れた傘にポリエチレンの傘袋が取付けられる。このユニークな装置は新倉計量器(株)・自慢のヒット商品である。この装置は、発明品好きな新倉社長と町工場の一人のプレス職人の出会いから日の目を見たのである。

1991年、ある雨の日の「と、病院に入ろうとしている老婦人がビールの傘袋に傘を入れようとしていたが傘の先がうまく袋の中に入らない。その時二人の男が近寄り、手際よく袋に入れてあげた。この男が発明者の村上稔幸である。彼は思った、「案外入れにくいな、荷物を持っていたら大変だ」と。彼は発明好きなプレス職人で、仕事が終わると夜12時頃までテレビを見ることもなく金属加工に専念するのが常だった。村上は装置の試作にとりかかった。し

特許庁からのお知らせ

平成14年度 知的財産権制度説明会 (実務者向け)の開催について

特許庁では、知的財産権に携わっている方々を対象とした実務者向け説明会を10月から全国12都市にて開催します。内容は、特許・実用新案等の審査基準、国際出願(PCT)制度の概要、審判制度の運用、国際特許分類(IPC)の検索など多岐にわたり、東京・大阪・愛知は6日間コース、北海道・宮城・広島・香川・福岡は4日間コース、埼玉・神奈川・京都・沖縄は2日間コースで実施します。

参加費は無料で、参加者には当日特許庁作成のテキストを配布いたしますので、是非この機会にご参加下さるようご案内いたします。

なお、各説明会の開催日時・場所等の詳細は、特許庁ホームページ(<http://www.jpo.go.jp/indexj.htm>)に掲載しております。

御不明な点がございましたら、特許庁総務課 地方班(03-3581-1101(代)/内線2107)までお問い合わせ下さい。

知的財産権「立見席」、「豆知識」、「弁理士風土紀」は都合により休載いたしました。ご了承ください。

パテント・アトニー

平成14年9月24日発行 第27号 無断転載禁止

編集/日本弁理士会広報センター

発行/日本弁理士会

東京都千代田区霞が関3-4-2 〒100-0013

電話 03-3581-1211(代)

FAX 03-3581-9188

<http://www.jpaa.or.jp>

「PATENT ATTORNEY」は「弁理士」のことです。



JPAA

JAPAN PATENT ATTORNEYS ASSOCIATION

日本弁理士会

かし静電気で閉じている傘袋の口を簡単に開くことができない。ある日、彼は靴をはこうとして靴ヘラを持ったときだ。このヘラを袋の端に引っ掛ければ、口を開いて傘の石突きを袋の中に案内できるのではないかと閃いた。このヒントもとにして数種類の機構を設計・試作した。村上は試作品の売り込みにも苦労し

た。しかし、新倉計量器の営業担当が会社に持ち込んだものの、倉庫の片隅に放置された試作品がしばらくして新倉社長の目に留まった。「これはイケる」と直感した新倉社長は即座に製品化を決定し、村上にすべてのアイデアを特許出願するように進言した。村上は約20件を出願した。

最初に発売した製品はペダルを踏んで傘袋の口を開くタイプであったため使用方法が十分に理解されず普及しなかったが、ペダルを廃止した「傘ぼん」1号機が1994年に発売されると多数の類似品が市場に出回った。1996年に2号機が発売される頃にはその数は30近くにもなった。

新倉計量器は、傘ぼんの早期権利化を図ると共に、市場の監視を強化し、類似品を注意深く市場から駆逐していった。現在では製品を見かけた人からの電話注文やインターネットを通じた海外からの引き合いもある。新倉社長はこの成功をきっかけに、次のヒット商品探しに余念がない。

(取材協力 新倉計量器株式会社)



日本弁理士会からのお知らせ

「特許・意匠・商標なんでも110番」
特許、実用新案、意匠、商標等について、
弁理士が無料で相談に応じます。(月~金)
弁理士の仕事や特許制度を易しく解説した
パンフレット(無料)やビデオ(有料)があります。



お問い合わせは下記まで
日本弁理士会(広報課) Tel 03-3519-2361
日本弁理士会大阪分室 Tel 06-6775-8200
日本弁理士会名古屋分室 Tel 052-211-3110